

(第一日目・午前の部)

第一部 東アジアの地域協力と日米中関係

復旦大学 報告論文

東アジア協力における文化的要素と中米日関係

陳 玉聘

第一章 東アジアの凝集力としての文化

1990年代に入り、世界政治経済の構造は二つの大きな変化を遂げた。一つはソ連の崩壊とともにイデオロギーを核心とする二大陣営の対立構造が崩壊したことであり、いま一つはグローバル化が世界の発展の潮流になったことである。前者はそれまでイデオロギーに束縛されていた民族個性を覚醒せしめ、後者により各国は、自身の世界の中での位置、自らの独立という合理的問題をさらに重要視するようになった。そしてこれらの結果として、多くの諸国は自分たちの文化の復興に力を入れ始めたのである。国家というものは政治と経済の共同体だけではなく、文化の共同体でもある。独立した文化を欠いた国家は、いかなる強国であっても植民地国家に過ぎないといえる。

東アジアの諸国の文化は共通の起源を有し、長い歴史のなかで、各国は同一の文化 政治と経済ではなく を核とする共同体に属してきたと同時に、歴史の発展の過程で各々の特徴を形成してきた。東アジアの諸国が自らの文化の発展に取り組みば取り組むほど、互いの文化における密接な関係と、難解な哲学思想から社会習俗に至るまでの多くの類似点に気づくであろう。

冷戦期、中国、日本、韓国等の東アジアの諸国は、それぞれ異なる陣営に属していた。そして冷戦が終結し、イデオロギーの拘束が緩まるにつれて、文化という親和力が相互信頼を生み出すようになった。文化的に独特な関係にあることから、東アジアの諸国が自国の文化を発展させるためには、一つの総体としての東アジア文化を発展させていかなるを得ず、文化によって自身の独立的存在を示そうとすれば、東アジア独自の文化圏を築かなければならない。このため、文化は東アジア地域協力の重要な内容でなければならない。

さらに、文化は東アジアの政治経済協力にも大きな役割を果たしている。東アジアはアジア・太平洋の中で極めて重要な位置にあり、各国は複雑な政治経済関係にある。また外部の諸国、と

りわけ米国は同地域において利益を貪ろうとしている。ただし、東アジアの政治経済協力が必要であることに疑う余地はない。政治の分野では、未解決の領土問題や各国の戦略の衝突が存在するものの、東アジアの諸国は平和で安定した周辺環境を必要としており、一国の政治的利益の追求は、往々にして地域の他の国々の協力を必要とするのである。

経済発展は我々にとっての最重要課題である。しかしながら政治、経済協力は意志のみにとどまりがちである。これに対して、文化による協力はより確実に遂行可能であるといえる。類似した文化を背景に、東アジアの諸国は互いの行為や意志決定を深く理解できるのである。つまり協力するにあたって、誤解を避けることができるのである。文化はそれ自体重要な要素であるが、東アジアの地域協力においても非常に重要な役割を果たしており、政治、経済協力をも増進させる。東アジア文化圏の構築は、この地域の世界への影響力をより大きなものにする。

第二章 東アジアにおける中国・日本の特殊な文化的地位と中日関係

5 千年の歴史を有する中国文明は、東アジア文化圏における文明の中心であった。当時、日本・韓国をはじめとした東アジア圏の諸国は、言語、慣習、哲学、政治制度、経済制度等の多くを中国から学んだ。中国文明は何千年もの間、他の文明の圧力を受けずに独自の発展を遂げていた。しかしながら、1840 年のアヘン戦争をきっかけに、中国は近代的な西洋文明と衝突せざるを得なくなった。敗戦が続くなかで、特に 1895 年の日本侵略により中国人民の自国の文明に対する自信は打ち砕かれ、それ以降中国は西洋から学ぶこととなった。1910 年代に「新文化」運動が起こると、終に中国文明は独自の発展を断ったのである。

しかし、幸いにも 100 年後の現在、伝統的な文化が見直されるようになった。中国文明が今日見直される理由としては、東アジア地域における古代中国文化の多大な影響力が挙げられる。中国には、その歴史的な東アジア文化圏への影響ゆえに、同地域において新たな文化共同体をつくるという極めて重大な責任があるのだ。歴史的環境が異なるため、現代の中国は、古代の中国と同じように東アジア地域において独自の文化の正統性を求めるのではなく、対等な立場で他国文化との相互対話と相互学習を進展させ、交流と共同発展をテーマとする文化環境を築くべきである。

日本は島国である。地理的状況や天然資源の制約があるため、日本人は強い危機感を有している。この危機感が日本人の学習能力を向上させた。隋・唐代の頃には、日本は多くの遣隋使、遣唐使を派遣した。645 年の大化の改新により、唐朝をモデルとした制度が日本で確立された。このように何千年もの間、日本文化は中国の影響を受けてきた。

幕府時代の日本では、日本特有の文化も生まれた。この時期に形成された「神道」「武士道」の精神は、日本人の価値観に染み渡り、現代においてもなお強い影響力を有している。17 世紀頃には、とうとう日本と中国の関係は崩壊し、鎖国政策により中国はおろか、西洋世界との交流も禁止されるようになった。その後、1853 年に「黒船」が来航するまでの 200 年間、日本文化は独自の発展を遂げた。黒船来航と同時に西洋の価値観と文化が日本に激しく流入した。第二次世界大戦による損失と大戦後の米国の日本統治がさらに日本への西洋文化流入に拍車をかけた。多くの諸国が日本を東洋国家としてではなく、西洋国家としてみなし始めた。しかしながら、大戦後の 30 年間に大きな経済発展を遂げたことで、日本は米国的価値観に対してそれほど

の信頼を寄せなくなり、1980年代以降、日本は独自の文化の復興に力を注いだ。今日の日本文化の特徴は、西洋文化と伝統文化双方の色彩を帯びていることである。

日本の文化的地位は特殊である。日本の文化は西洋文明、東洋文明のどちらに属するのであるか。それともどちらでもなく独立した日本文明なのであるか。1世紀以上前、日本は「脱亜入欧」を経験したが、現在の日本には「アジアへの回帰」傾向が見られる。東アジア地域の文化の中で、日本は西洋文明への掛け橋であると同時に、周辺地域に多大な影響力を持つ国ともいえる。日本文化における拡張主義思想と集団主義精神は、日本の経済発展を促進する動力となったものの、同時に東アジアの諸国に強い警戒感を抱かせる要因ともなっている。しかし、いずれにせよ、日本と東アジア文化の淵源は深く、日本は当然、東アジア文化の建設に復興に貢献できるのである。日本とこの地域の他の国々の間にある溝は、何らかの方策でできるだけ埋めていくべきである。

文化の上では、中国と日本の間には吸引力と排斥力の両方がある。一方、歴史的な理由から、日本と中国はさほど親密な関係とはいえない。日本の中国侵略の歴史と日本政府の歴史に対する姿勢が中国人に反日感情を抱かせているのである。他方、中日の伝統文化は非常に密接な親縁関係にあり、中国の青少年も日本の流行文化の影響を受けながら成長してきた。さらに両国は、現代社会において自国文化の復興をいかに成し遂げるかという問題に直面していることから、共通点も多い。両国の文化上の吸引力と排斥力は直接両国の関係に影響を及ぼす。

地域の政治大国としての中国と経済大国としての日本には、東アジア文化を復興させる責任がある。両国は、できるだけ早く歴史問題を解決し、文化交流を推進し、東アジア文化圏の形成と政治の安定、経済の発展に、共に貢献すべきである。

第三章 米中、日米関係の中の文化要素と

世界における東アジア文化の役割

米国は、建国から200年余りしか経っていない歴史の浅い国である。しかし、その強大さは、近代の資本主義精神を象徴しているといえる。米国の文化はプロテスタント主義文化である。それが強調するのは競争であり、個人の努力であり、個人の権利であり、法の整備であり、実用主義である。これらはすべて資本主義経済が最も必要とする文化の外形である。マルクスとエンゲルスは、その著書『共産党宣言』の中で、「ブルジョアジーは、何であろうとも支配し、全ての封建的・家父長的・牧歌的な関係に終止符を打ってしまった。……ブルジョアジーは宗教的情熱や騎士道的熱狂や俗っぽい感傷による最も崇高な喜びさえも、利己的計算の冷たい水の中に沈めてしまった」と述べている。

このように米国は、完全な市民社会である。そして、こうした文化は米国に大きな成功をもたらした。しかし、その結果、米国民が東方文化の温和さ・忍耐・謙遜や集団主義を理解することは困難であった。さらに、米国文化は普遍主義の特徴を有しており、自国の制度や価値が世界で一番だと考えて、アメリカ文明を世界に押し広めようとしている。

米中関係は、文化の問題、なかでも価値観の問題と密接に繋がっている。米国は、政治と経済の両面において中国を必要としているが、文化の面では、中国に対して友好的でない。一般的に、

米国が世界の中で優位な情勢に立つ場合、政治的理想主義が外交政策の要となる。逆に力が及ばない場合は、現実主義が優勢となる。1970年代、旧ソ連が米国の覇権主義に対抗して台頭したため、米国は中国問題に対処していく上で、自国の利益を重視した。1980年代以降は、共産党の解体やロシア崩壊によって、中国に対してより理想主義的な政策を実行してきた。

米国の中国に対する敵対心は、米中関係にしばしば問題をもたらし、米国の東アジア戦略にも変化を与えた。中国人が開放政策の考えに基づきアメリカ文化を理解しているのに対して、大抵の米国人は、中国の文化や価値観に対する知識がほとんどなく、テレビや新聞を通じた中国しか知らないのである。実際、米中関係の課題は、文明の衝突ではなく、このような誤解と無知にあるのだ。

今日のブッシュ政権の外交ブレーンの中には中国問題専門家はおらず、中国文化に精通した中国通さえもない。このように、ブッシュ大統領は中国の問題に対処するときに、中国の態度や意図を十分に理解することができないし、このことは容易に米中関係の不安定に結びついてしまう。それゆえ、この二国間関係は政治経済問題だけでなく、文化におも重要な文化問題でもある。中国は自国の文化をさらに宣伝するべきであり、米国は盲目的な自大心理を棄て、中国と中国文化について理解を深めるべきである。

文化は、日米関係においても重要な要素である。米国は1850年代に、日本に対して開国を迫り、第二次世界大戦後も米国が日本を最大限に支援したことで、日本は高度経済発展道を歩むこととなった。そしてその過程で日本は大量のアメリカ文化を受け入れたのである。こうした文化的な親近感により、米国は次第に日本を、最も信頼できる盟友と見なすようになった。これと同時に日本政府の歴史に対する態度は、たびたび東アジア各国の文化の中の反日意識を刺激し、日本をさらに米国に近寄せ、依存させた。経済面だけでなく、文化の面でも日本はアジア中の米国といってよく、米国が日本を重視するのは、政治的経済的な配慮からだけでなく、文化や価値観が似ているからでもある。

しかしながら、1980年代以来の日米関係は、必ずしも安定しているとはいえない。それは、日本が経済的に大きな力を持ち、もはや米国文化に確信を持っていないからであり、冷戦の終結とグローバル化の深化に伴って、日本が自国の文化の復活を考え始めたことも要因の一つである。日本の伝統文化は、2000年余りの年月をかけて発展してきたものであり、この影響は容易に排除できるものではない。日本のアジア文化への回帰の機運が高れば、日本の東アジアへの帰属感は次第に強まり、日本はもはやアメリカにとって信頼できる東アジアの小さなパートナーとはなりえず、日米関係はさらに多くの変数を抱えることになる。

米中関係と日米関係は、文化の視角から見ると、東アジア文化と現代西洋文化の関係である。東アジア地域独特の文化圏を確立しようとするならば、西洋文化だけでなく、イスラム文化やアフリカ文化といった他の文化と関わっていかなくてはならない。簡単にいえば、これは世界における東アジア文化の役割と位置の問題である。19世紀中葉から、西洋文明の圧力の下、多くのアジア諸国は伝統文化に対する自信を失い、西洋化を主張した。そして、20世紀になると、伝統文化の精華を取り入れ、不要な部分を捨て去るべきであると多くの人が考えるようになった。しかし、このように文化を簡単に善し悪しで分けてしまうのは非常に浅はかな考えである。東アジア文化は、開放的なシステムであるべきなのだ。それは、世界に対して開放的なだけでなく、時代に対しても開放的であるべきである。そして、他の文化との疎通を図るだけでなく、自国の文化自体を改善するべきである。

東アジア協力における文化的要素と中米日関係

東アジア文化の最も重要な特徴は「和合」である。東アジア文化圏はこの特徴を発揮し、文明の衝突を起こすのではなく、他の文明との和解を実現すべきである。東アジア文明にとって必要なのは、他文明との柔軟な交流であり、「殺し合い」の闘争ではなく、平等・相互信頼を手本として、寛容な文化精神で、東アジアを世界平和維持のための重要な力にすることである。私は、東アジア文化が世界の文化と地球の平和に深く貢献するものであると信じている。

